

「ふくしまの未来をひらく読書の力 プロジェクト」

読書活動支援者育成事業 地区別研修

主催：福島県教育委員会

子ども読書セミナー

目的：読み聞かせの効果や家庭での読み聞かせの大切さについて知る機会とするとともに、読書ボランティア活動への理解を深める。

- I 実施日：平成30年6月14日（木） 場所：桑折町屋内温水プール・多目的スタジオ「イコーゼ」 参加者：36名
- II 実施日：平成30年6月28日（木） 場所：福島市清水学習センター 参加者：32名

I 6/14（木）

第1部

10:05～11:00

講話「子どもの読書活動の影響と効果」

講師：福島県立図書館 資料情報サービス部 専門司書 鈴木史穂 氏

1 はじめに

- 子どもに本の世界の楽しさを味わわせてあげることは、とても大切なことである。
- つらいときや悲しいときに本に支えられる時がある。
- 「グリとグラ」は1967年から今まで504万部発行されている。子どもの頃に読んでもらった本を、子どもや孫に読みたいと思うような本もたくさんある。



2 子ども・読書・インターネット

- 読書冊数の推移から、高校では本を読む生徒が減少していることがわかる。不読者の割合も高校生では、約50%にもものぼる。
- インターネットを介する情報機器の利用は増えているが、電子書籍で読書をする割合は低い。
- スマートフォンに子守をさせる親が話題になるが、親子のふれ合いを大切にする方法として読み聞かせをしてほしい。

3 子どもと本をめぐる社会の動き

1997年：学校図書館法改正（司書教諭の配置）

2000年：子ども読書年

2001年：子どもの読書活動の推進に関する法律施行（すべての子どもがあらゆる機会を通して本に親しめるようにすることが提起された）

2014年：学校図書館法改正（学校司書の配置）

- 子どもたちが身近なところで日常的に本に親しんでいくための社会の動きがある。
- 学校図書館は、子どもだけでも気軽に行くことができる図書館である。そして、配置されている司書は本のナビゲーターである。子どもたちを見守り、子どもたちと接する時間をつくり、本の持つ素晴らしさを伝えていきたい。

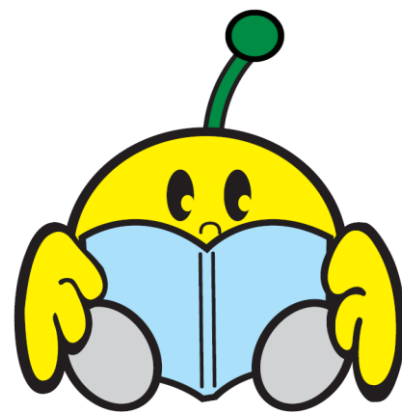
4 子どもの読書活動の影響と効果

- ・「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」によると、子どもの頃に読書活動が多かった成人ほど、「未来志向」「社会性」「自己肯定」「意欲・関心」「文化的作法教養」「市民性」の全てにおいて大人になってからの意識・能力が高いという調査結果がある。
- ・全国学力・学習状況調査結果から、読書や読み聞かせを多く経験した子どもは、そうでない子どもに比べて学力が高いという相関関係が見られる。
- ・読み聞かせをしてもらった経験や本を読んだ経験は、想像力の構築につながり、様々なことを想像できる子どもになる。空を飛ぶ、遠くへ行くなどの様々な想像力は、気持ちの共感につながり、人への優しさや思いやりの心情を育てていく。
- ・2歳の男の子が、母親にかまってもらいたいときに「さびしい」と言葉で訴えた事例がある。2歳の子どもが通常使う感情表現ではないが、本を読んでもらっていた影響で自分の感情を言葉にできるようになった例である。子ども時代に本に親しむことは、自分の気持ちを言葉にして伝える力を育てることにつながる。



5 おわりに

- ・信頼できる人（先生や友達）からおもしろいと紹介された本が自分の考え方や生き方を、よりよい方向へと導いてくれることもある。私自身挫折を味わったときに会った「モモ」という本もそうであった。
- ・絵本「よめたよ！リトル先生」のリトル先生のように、子どもを支える大人（カリスマティック・アダルト）になっていくことが大切である。読書によって得られるものは多く、自信や知識、生きることそのものにつながっていく。
- ・「物語が生きる力を育てる」 脇明子/著
岩波書店 2008 p. 84-85 の紹介。



【参考文献】

- ・「第63回読書調査」の結果（全国学校図書館協議会）
- ・「青少年のインターネット利用環境実態調査」（平成29年3月 内閣府）
- ・「低年齢層の子供のインターネット利用環境実態調査」（平成29年5月 内閣府）
- ・「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究 報告書〔概要〕」
国立青少年教育振興機構 平成25年2月23日
- ・全国学力・学習状況調査「保護者に対する調査」
文部科学省委託研究「平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」（国立大学法人お茶の水女子大学）
- ・第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」について（文部科学省）

第2部

11:05~11:55

事例発表及び演習

「読書ボランティア活動を通して」

発表：ファミリー文庫ら・みるく 紺野涼子 氏

演習：ファミリー文庫ら・みるく

1 ファミリー文庫に参加して

平成5年創設。平成6年に、6名で活動を開始。「ら・みるく」の他に「コスモス」、「ホットケーキ」、「スマイル」があり、それぞれに特徴のある活動を展開していた。



2 主な活動

「イコーゼ」のベビーズルーム「おはなし会」を年6回担当し、桑折町内の幼稚園や保育園、小学校、学童保育などで読み聞かせ活動を行っている。また、7ヶ月検診でブックスタートの話と絵本のプレゼントを行っている。



3 読書活動に対する思い

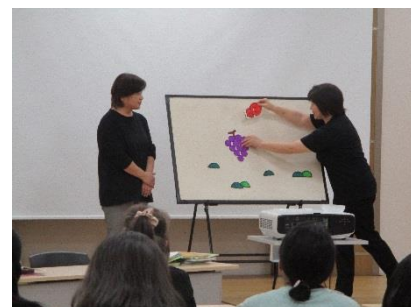
- ・自分は、幼少期に家庭で本に触れることができる環境だった。それが、本好きになった要因の1つである。絵本には、自然、生活、健康など、子どもたちが学ぶことが全部入っている。
- ・本の楽しさを味わわせることが、自然と本を読むようになる習慣を身につけることにつながる。活字以外の本であったとしても、興味を持った本に触れさせることで結果的に読書好きな子どもに育つ効果がある。また、自分の気持ちを言葉にして伝える力が身につく。

4 今も、そしてこれから読書活動にかかわっていく方々へ

- ・選書は余り難しく考えず、自分の読みたい本を読んであげれば良い。読み方や伝え方を考えながら読んであげると、子どもたちは自分で考え、想像しながら聞くようになる。高齢者施設でも読み聞かせは喜ばれるので、いろいろな人たちとの出会いを楽しんでほしい。

5 演習

- ・大型絵本「冷蔵庫」
- ・OHP を使ったの読み聞かせ「たまごの絵本」
- ・パネルシアター「ひよこちゃんのさんぽ」
- ・たまごの手遊びうた
- ・紙芝居「ごちゃまぜカメレオン」
- ・ペープサート「カエルのおなか」
- ・うた及び楽器の演習「カエルのうた」



【参加者からの声】

- ・講話では、ご自身の体験やエピソードを交えたお話で、楽しく学ばせて頂きました。実演では、自分が読み聞かせをする上で、すぐに役立つようなヒントが満載の内容でした。

講話「子どもの読書活動の影響と効果」

講師：福島市立図書館 主任司書 猪狩美紀子 氏

1 現在の子ども読書

- 2017年の県教育委員会「読書に関する調査」によると1ヶ月平均の読書冊数は、小中では微増、もしくは横ばいである。しかし、1冊も本を読まなかった生徒の割合が小学生1.2%、中学生12.5%、高校生47.3%に上っている。年齢が高くなるにつれて、不読率が上がっている。



2 本は必要？「読書」が子どもにもたらすもの

- 書き手との対話をするようになるので、作者が伝えたいことを推測することができる。それは、相手の気持ちを想像することにつながり、思いやりの心情が育まれていくことにもつながる。
- 読書とメディアを比べると、知識を情報として得る過程において違いがある。メディアは、映像によって一瞬にして情報が入ってくる。そのため、知識の蓄積にはつながらない。しかし、読書は自分の理解のスピードに応じて何度も立ち止まって読むことができる。結果的にじっくり入った知識や感性は自分自身の中で残っていく。
- 読解力においては、AIより人間は優れている。子どもたちは、読書からその力を学ぶ。自分で学ぶことができる大人になっていく。

3 物語がもたらすもの

- 実体験を補う深い読書体験が可能になる。楽しみながら思考力や想像力を育てていける。また、「自分の言いたいこと」を言葉でとらえられるようになり、子ども自身の世界を広げる。
- 主人公の心情を客観的に観察することができる。そのような経験により、自己制御できる力が育ち、トラブルに対する望ましい対処方法が形成されていく。

4 子どもの本の選び方

- 子どもが本を選ぶときには、自分が出会った範囲内で選ぶことも多い。大人が選んであげることが子どもが本当に好きな本に出会うきっかけ作りになる。
- 子どもにとってよい本とは、成功体験や達成感が感じられ、人間や世界について前向きな姿勢が持てる本である。また、想像できる余地を残している絵本も良い。

5 読み聞かせの意義

- 絵本は「大人が子どもに読んであげる本」である。読み聞かせをしてあげることで、子どもは絵と文章を目と耳で同時に味わうことができる。
- 集団での読み聞かせは、良い物語を共有することになり、新しい可能性を広げることができる。集中して聞くことができるように、感想を求めてはいけない。



6 大人が子どもの読書のためにしたいこと

- 読書の強制や押しつけはせずに、読書に親しむ気持ちの育成や環境作りをしてほしい。本と読書に良い印象を持たせ、「読みたい」という欲求を育てるようにしたい。
- 大人が子どもの本にも興味を持ち、楽しさを共感することも大切である。思考力や読解力の向上は読書の成果としてすぐにできるものではない。おおらかに見守る気持ちが重要である。

7 おわりに

- 柳田邦男「危機的な日本の中で生きる若者たちに八カ条」を紹介

事例発表及び演習

「読書ボランティア活動を通して」

講師：西地区子どもと本をつなぐたんぽぽの会代表 古関智恵子 氏

演習：西地区子どもと本をつなぐたんぽぽの会

1 会の発足

- 昭和63年、「たんぽぽ文庫」として活動を開始。平成12年に「西地区子どもと本をつなぐたんぽぽの会」に改称した。

2 主な活動

- 10名の会員でブックトークを中心としたおはなし会を行っている。地区内の小学校や子育てサークルなどで、定期的に行っている。会員それぞれが得意分野を生かして、活動を続けている。
- 西地区文化祭「子どもの広場」で「親と子と本のつどい」を実施し、あづま総合体育館では、「あづま文庫でのおはなし会」を開催している。会員みんなで話し合いながら行うことで、活動の幅が広がっている。
- 佐原集会所で「さばら文庫」と協力しての活動を行っている他、定例会や研修会、読書会など様々な活動を展開している。子どもの笑顔に会えることを楽しみに活動を長く続けている。



3 演習「よみきかせ・ブックトーク等の実践」

【手遊び歌】

よいさっさ・かっぱのじゃんけん

【ブックトーク テーマ〔たねのりょうこ〕】

「たねのさくせん」「たねのりょうこ」
 「ぼくはたね」「たねがとぶ」「たんぽぽ」
 「植物期」「タネはどこからきたか？」



【読み聞かせ】

「みしのたくかにと」「しっぽ」
 「すいかのたね」

- 本の中に登場する花や植物の種を実際に見せながらのブックトークや読み聞かせであった。



4 西地区子どもと本をつなぐたんぽぽの会の願い

- 自分たちの活動が、子どもたちの好奇心や探究心を育む手助けになればと思う。絵本、物語、民話の世界を子どもたちと共有し、本の好きな子どもたちをいっぱいになりたい。



【参加者からの声】

- 子どもにとって「読書活動」がなぜ必要なのか、どのような本が子どもの成長に良い影響を与えるのかについて、大変勉強になりました。また、演習を見て、自分が活動する小学校でも実践してみたいという意欲もわいてきました。愛情いっぱいのほんわかブックトークありがとうございました。
- 「たね」をテーマにして、こんなにも話を膨らましたり、興味を広げたりすることに感激しながら参加させて頂きました。本を選ぶときに子どもたちと一緒に楽しむ気持ちを大事にしたいと改めて感じました。ありがとうございました。